四季花卉図（1877 年）

跡見花蹊の画業

花蹊（一八四〇～一九二六年）は南画・文人画の流れに立つ画家である。門流から見れば、日根対山の弟子に当る。

伝統的な南画様式による山水や花鳥草木などの作品を数多く見ることができるが、その一方で、和様の作品も少なくない。その画風は力感あふれるものであり、賛の書ともあいまって花蹊作品の独特な魅力をたたえている。花蹊は幼時から画を好み、また、若年の頃から、絵筆を揮って、学資の糧にしたという逸話も幾つか残されている。自在、多作の画家ということができよう。

明治の頃の画家たちの「番付」を掲げた一枚刷りの資料があって、興味深い。画家に限らず、万事にことよせて「番付」を作ることが明治には行なわれ、流布していたが、閨秀画家が掲載されているものもあり、その種の番付表の中に、花蹊の名を必ずといってよいほどに見出すことができる。

書作品の場合と同様、花蹊の画業は、教育とも結合していた。跡見女学校の絵画の授業で直接生徒の指導に当ったことは云うまでもないが、一方で花蹊は、手本作成にも力を注いでいる。すべては生徒たちの教育の教材とするためであった。ちなみに、書の手本も含めて、花蹊が生涯に筆を執って作成した法帖の類は二万に上ったという。

下絵の類も伝存しているが、興味深いのは、花蹊の数多くの手帖である。メモ・雑記・日録の類と合わせて、旅の途上、外出の折々に属目した風景、人物、事象を、鉛筆書き、もしくはペン・筆でスケッチしたものが数多く見出され、画家花蹊の、日常生活の中での研鑽と習練の営みをうかがい知ることができる。

（跡見学園女子大学花蹊記念資料館・開館記念特別展《跡見花蹊とその時代》図説解説、一九九五年一一月発行より、許可を得て転載）